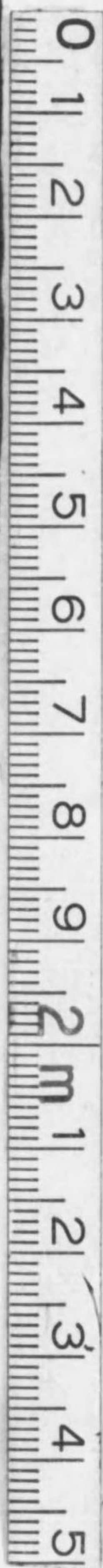


特 253

971

備筋陶器



始



時253
171

翻請會雅

不
論
鱗
鳳
與
魚
蛙

萬
象
出
窰
一
夕
佳

假
此
鏤
玄
琢
黃
妙

詩
天
補
得
繼
靈
娼

題伊部窯

明
瑞

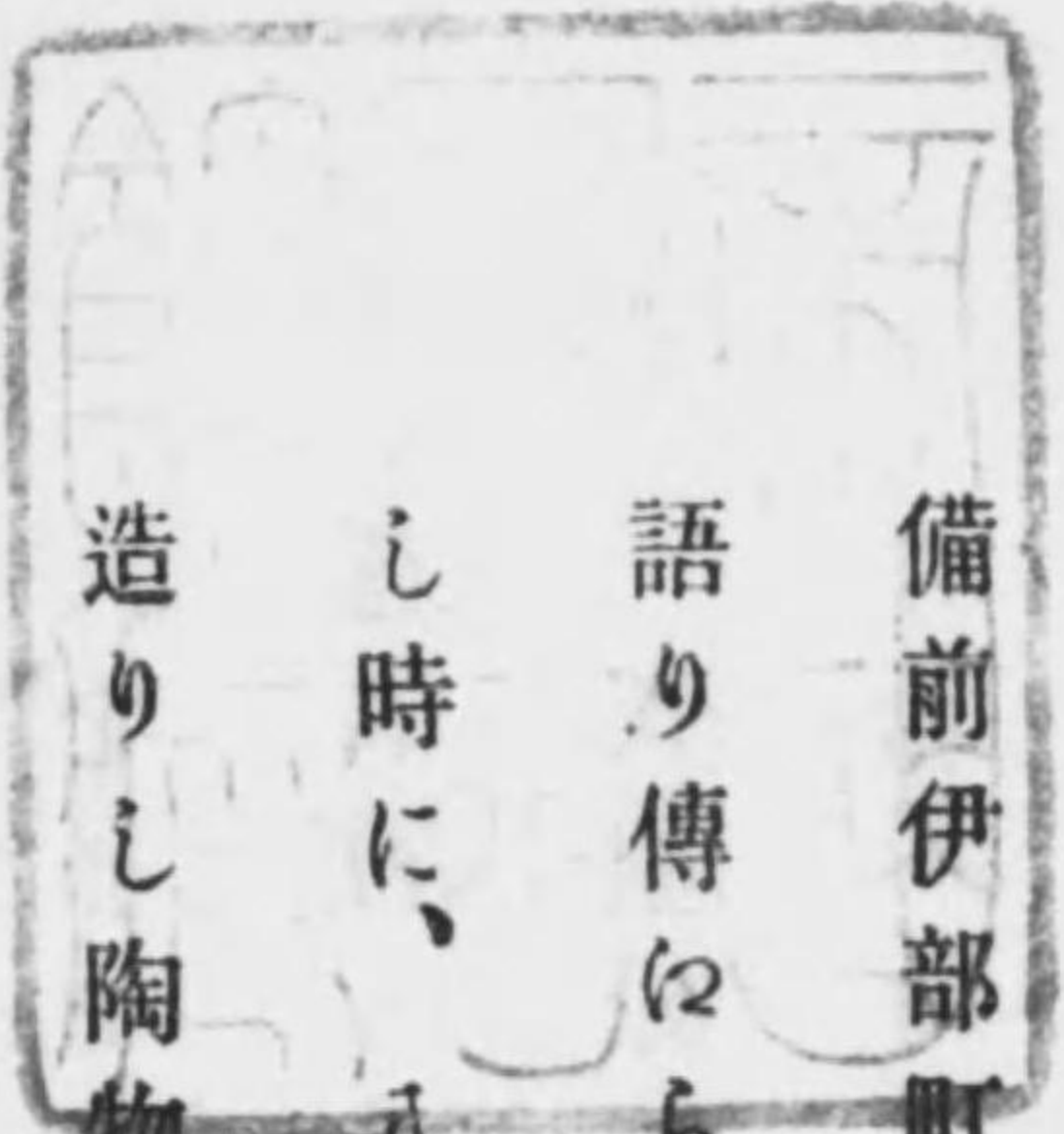
いそのかみふるきかみよゆするものゝ

わささかゑゆくさこはたのしも

陶廬舎

義景

備前陶考



備前伊部町に産する陶器は遠く神代より創めしこなん
語り傳へられたり。即素蓋鳴尊八頭の大蛇を斬り給ひ
し時に、入醞の酒を醸せし瓶はその昔赤坂郡石上にて
造りし陶物にして伊部焼の創始なりとぞ。尊大蛇を斬
り給ひし劍をその地の土師に賜ふ。これ石上布都魂神
社の御神體なり。



又我國には上古朝廷の御葬に殉死のことがありけるを、

垂仁天皇の御代に出雲國人野見宿禰その國の土部百人を召して埴をこつて、人馬其他の物の形を造りて朝廷に献り生人にかへて御陵に従へ奉らんと申せり、

天皇厚くめで給ひて其土物を埴輪となし立物と名づけ給へり。後世他の陶器を陶物といふに伊部陶のみを立物と稱ふるもその起源實に此によるものか。今尙造る人物鳥獸等は即ち埴輪の遺風にしてその精巧なる他

の陶器に見ざる所なり。伊部の地往古より土部の居住して種々の祭器を造りしなり。延喜式に

備前國所造 甕ムササケ三十口 水瓮ホトケ同 都婆波ツバハ六十口 大三十口 小三十口

缶モクヒ三十口 置盎チキ同 酒垂サカサ同 匱ヒサシ同 筥瓶ヒコガメ同 短女坏ヒメメ同

山坏ヤマツキ同 片盤カタラ同 酒盞サカサ同 小埴コツキ同 陶白タマシ同 已豆岐イヂマキ同

とあるは皆大嘗祭の祭器として献りしものなり。

古代祭器忌瓶齋瓶は最重要視せられしものにてかの古事記孝靈天皇の条に「大吉備日子命若建吉備津日子命

二相副而於針間泳河之前忌瓶而針間爲道口以言向和吉備國」也とあり。又萬葉集にも伊波比陪を据ゐて軍の首途を祈ること見たり。上古詔を承りて言向に出づる際は平安に使命を果さんことを冀ひ忌瓶を据ゐて神に祈りしものか。地名伊部はこの忌瓶齋瓶の轉して忌部齋部となり今に至りしものにてその陶器の潤色釉彩を施さずして素朴なるは之祭器製作の遺風なり。

天正拾年三月豊臣秀吉公中國征伐の途次、伊部大饗五

郎右衛門の邸に滞留して數日陶工を召して茶器花瓶人物鳥獸等の製作を御覽あり。

感賞の餘り自らも製作し福島加藤の諸將又作あり。時に秀吉公陶業保護の必要を感じ左の制札を下せり。

制 札

當所伊部村之事陣取相除候然上者
彼在所へ出入一切停止若違犯族在
之者速處嚴科者也

天正十年三月

筑前守花押

秀吉關白となりて及びて尙陶器を献ぜしこ。次いで池田氏國主となりては陶業保護に心ざし入部の際細工御覽あり大窯口開の際は奉行を派して御買上より荷造迄。嚴重に取締り窯元中御細工人を命じて切米を給せり。爾來陶窯の業大に發達して名工輩出し備前伊部焼の

名聲は天下に知らるゝに至れり。


斯く備前焼は我國陶窯史上最も古き歴史を有するものにして、古備前、古伊部と稱して珍重せらる。うの數百年を経たる大窯時代のものに至りては雅趣言ふ可らざるものあり。焼色は本來赭色なるも用土、焼方によりて青備前、緋襷、棧切、白備前、等あり。青備前、緋襷の幽艶、白備前の洒脫高尚なる、棧切の雅致に富みたる何れも世人に愛好せらるゝ所なり又繪備前と稱するあ

り優雅にして古典的なるものなり。尙此他にお庭焼、
閑谷焼、虫明焼と稱するものあり。備前焼の亞流と認
められ各獨特の趣ありて愛翫せらる。
備前焼の名工古來少からずと雖も文献備はず、その
審なることを知るに由なし。僅に探り得たるを擧ぐれ
ば永祿の頃に、

- ⊙ 木村三郎兵衛
- ⊙ 木村庄三郎
- ⊙ 木村吉右衛門
- 上 森 惣兵衛

なごあり。天正年中の名工として、

- 正 森 清次郎
- 一 木村長左衛門
- 己 森 清右衛門

同じ頃に六郎兵衛といふ者あり。その作に缺月を刻す
るを以て  三日月六郎兵衛の稱あり。又茶器をよくす
る者あり。櫻花を以て印す。然れども櫻花は三日月
に及ばず。二者肥厚にして堅實なる我國に冠たり、天
正、文祿、慶長の頃には

○ 宗伯 丁 新平 十 茂右衛門

↑ 正玄

等ありて、共に茶器の名人なり。古備前鑑定の俗謠に

井は古し松葉正玄 丁新平

○は宗伯 十は茂右衛門

井印は最も古けれご氏名詳ならず。其他大瓶なごに古き印として

五久又命 ㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

等の刻印あるも年代人名考ふべからず。

㊦ 木村 勘 六 ㊧ 木村 善 四 郎

は共に元和年間の人なり。寛永の頃には。

㊨ 寺見次郎兵衛 ㊩ 木村九郎兵衛

上 森 念 心 ㊪ 金重宗四郎

㊫ 寺見次郎兵衛

慶安、延寶、天和年中の人にて、

㊬ 木村長三郎 ㊭ 木村太左衛門

森 清三郎
 木村 平四郎
 木村 元心

元和年間の作者として、

了 庄兵衛
 十 彦三郎
 力 新五郎
 〇 惣四郎
 大 彌一 郎
 中 五郎太夫
 大 長兵衛
 了 助三郎
 〇〇 七兵衛
 茶 彌平治
 〓 五兵衛
 中 二郎左衛門
 〇 惣兵衛
 命 忠三郎
 △ 二郎左衛門

了 庄太夫
 上 才之助
 了 彌五郎
 〓 治兵衛
 与 三右衛門
 上 善兵衛
 十 清三郎
 〓 兵三郎
 二 七郎兵衛
 見寺 二郎兵衛
 了 太郎右衛門
 〓 長右衛門
 金童 七郎

あり。元祿年中木村長左衛門は藩主より細工人を命ぜられて年々米拾五俵を給せられて、御用達となり、而して嘉永二年木村長十郎友直に至るまで七世相受けて

細工人を拜命す。友直に至りて加俸せられたりを聞く。
貞享の名工に

↑ 森 彌左衛門 ↑ 木村 道休

⊖ 木村 秀四郎

あり。就中道休は茶器に巧なり。正徳寛保の頃

☐ 五郎 兵衛 ☐ 雲貞(轆轤の名手)

△ 木村 良心

延享に木村甚七ありて、五分獅子の作に名高し。寶暦年

間の金重利作亦細工人用達を命たらる。明和に木村作
十郎あり、人物の名手として知られ、又服部平四郎な
ごあり。安永の頃木村平四郎何處の者たるを知らず。

元心の家に寓し専ら細工に従事す。同じ頃大饗平十郎
といふ者壺類一升入何程五合入何程と寸法を定めたり
。森庄八は天明年間始めて角徳利を造る。寛政に木村
新七貞固ありて、後に直左衛門と改め細工人用達とな
る貞固の子に貞幹ありて名作あり就中貞固の作品は優

秀なるものとして普く知られ名聲噴々たり享和の森良明茶器をよくし、文化年中轆轤の名手として茂市といふ職人あり。嘉永年間に於ける細工人御用達は

木村長十郎友直

金重利吉

木村新七郎貞泰

木村盛次清近

金重初太郎

服部昇平

等なり。同じ頃茶器の名工に木村平八郎泰武ありて、書畫詩歌連俳をよくしらの作に刻す。泰武文筆にすぐ

れ五問五答古伊部神傳録を著して伊部焼の沿革を記せるあり。金重彦右衛門は轆轤の名手殊に古形の大瓶を造るに巧なり。文久慶應の前後に木村直平あり。明治年間にありては、

日幡久男正直

永見駒造陶樂

森喜作

あり正直、陶樂の二名工は當時並び稱せらる、二名工として共に人物鳥獸等の細工に妙技を振ひて名あり。

古備前焼の鑑定に便なるものに曹源公（池田綱政公）
御手記あり。即ち

伊部焼物印

西窯 九人

了 庄兵衛 力 新五郎 大 彌 一郎

大 長兵衛 〇〇 七兵衛 十 彦 三郎

〇 惣四郎 四 五郎太夫 行 助 三郎

北窯 拾人

彌 平次 〇 二郎左衛門 命 忠 三郎

占 治兵衛 上 才 三郎 五郎衛門

△ 清五郎 了 庄太夫 子 平 四郎

彌 五郎

南窯 拾人

引 與三左衛門 十 清 三郎 乙 七郎兵衛

同 五郎兵衛 口 太郎右衛門 上 善 兵衛

◇ 兵 三郎 見 寺 二 郎 兵 衛 同 長 八 郎

五郎兵衛の子

畫源七郎

附記

備前燒窯元

(昭和二年二月現在)

山

春湖

西村安次郎

仁

仁堂

大饗時松

陶

陶陽

金重勇

十

金重勉

十

難波周太郎

樂山

樂山

藤原幸八

井

黃薇堂

木村一

興樂園

興樂園

木村貫一

宗得

宗得

木村宗太郎

金

木村正二

桃蹊堂

桃蹊堂

木村兵次

陶景

陶景

三村藻三郎

313

321

昭和二年三月二十五日印刷
昭和二年四月二十五日發行

不許
複製

編輯者

印刷者

發行所

日

幡義景

岡山縣和氣郡伊部町
吉野三ノ八番地

大

塚保

岡山縣和氣郡和氣町
二ノ七拾一番地

備前燒研究會

岡山縣和氣郡伊部町
七百拾番地

↑ 今 ↑ 日 日 日 倉 十

華山

柴岡米田
久本利惠吉

森 豐二

森 虎次郎

森 琳三

森 數太

森 萬吉

森 健二

陶岳

終

